

## ヤスクニ・レポ 250

# 「明仁モデル」と主権者であるということ

星出卓也(日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師)

NCC靖国神社委員会は11月18日に「天皇代替わりを総括する」のテーマで集会を開き、伊藤晃さん(近代の天皇制史研究者)から今回の「代替わり」を通して問われた問題を共に考えました。その中で多々教えられたことを記します。

30年前の「代替わり」と今回の「代替わり」の大きな違いは、天皇への好感度が飛躍的に上昇し、多くの支持を天皇が得た中での「代替わり」であったと言えます。30年前には日本のインテリにとっては戦争責任を負った天皇制に批判的であることがステータスであったのが、近年はむしろ戦後の民主主義を天皇の行動や発言に期待する傾向が見られるようになりました。明仁氏在位の30年を振り返って問われる問題は、どうして日本社会は天皇制への批判精神を継承し、深められなかったのか、ということにあります。

そもそも明治から始まる近代天皇制は、それ以前の支配階層を権威付ける権威の象徴だけではなく、「国民と共なる天皇」「私たちの天皇」という意識を国民の中に培うことによって「国民国家」を形成し統一させるという役割がありました。言い替えれば、近代天皇制での天皇の地位を存在させている根拠には「国民の思い・意識」が、大きな位置を占めています。日本国憲法第一条の「**天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く**」にも、このことは見事に継承されています。

それゆえ、明仁氏が在位した30年間、彼は努力して国民の要請に応えるべく、「戦後の民主主義日本」を表す天皇を演出することに日夜努力してきました。明仁氏は、様々な政治的状況を彼なりに分析して、父親の裕仁氏とは違うあり方を示し、国民に親しく言葉をもって語る天皇、戦没者の追悼に出かける天皇として、明治、大正、昭和とも違う戦後民主主義の「明仁モデル」を作りました。それは社会の現実問題

の解決をめざすのではない、彼が行う行動によって国民が一致した心の持ち方を教え導いて行く。これが、明仁が創り上げたモデルでした。

戦後の日本には、国民が主権者であるという意識が強く根付いていながら、その主権を越えた天皇の存在を当然のこととして受け入れています。なぜ、主権者であるということと一見矛盾する「象徴」の存在を日本市民は矛盾としないのでしょうか。日本の「戦後民主主義」は、「by the peopleなきfor the people」の形成だったのではないのでしょうか。本来「民主主義」というものは自分の在り方を自分自身で決めることです。「by the people」なき「for the people」は本来ありえません。しかし、誰かに任せる意識が戦後日本には尚も強く残り、「国民の総意を天皇が代表し象徴する」ことを求めています。自分で自分を表現する主権ではなく、天皇に表現してもらおうことを「主権者」として侮辱とは考えない。天皇制を支え続けているのは、今の私たちの「誰かにやってもらおう体質」の中にあります。これを克服できない限り天皇制はなくなることはありません。

私たち日本の市民は、この状況にどう対応をするのか。天皇制は近い将来廃止することができるのは、天皇がやっていることを代わりに行う主体が必要です。共和制を創るには共和制を担う主体が必要なのです。沢山の問題の中で無数の団体が存在しています。しかし互いが協力し合い、一致し、繋がるのが本当に難しい。自分の隣にある運動と、話し合い批判し合い行動を共にすることが本当にできるか。もしそれが成り立つようになれば、象徴となるような存在は、もはや必要がなくなるのではないかと思います。

またこれこそが西川重則代表が切に追い求め、労苦してきたことであると、この度の学習会を通して思われた次第です。

## 2020年12月18日例会奨励「新型コロナウイルスを通して聴く神のメッセージ」

詩篇 100篇 山川 暁(日本キリスト教会東京告白教会員)

新型コロナウイルスの終息が見通せないまま、降誕節を迎えようとしています。7月には西川重則代

表が天に召されました。しかし、コロナ禍にあってもヤスクニ問題から目を離してはならない、という

亡き西川代表の思いに立って、ヤスクニ問題と取り組んできました。

教会も新型コロナウイルスへの対応に追われてきました。新型コロナウイルスを単に疫病としてだけでなく、キリスト者は、新型コロナウイルスを通して神からのメッセージを聴く必要があると思います。

詩篇100篇の記者は、神を知ることと呼びかけ、人が神によって造られた存在であり、また喜んで神に仕える存在であることを語っています。さらに、主こそ神であることを知れ、と呼びかけています。新型コロナウイルスが猛威を振るっている現在にあっても、主こそが神であると、キリスト者はその確認を求められています。人間を造られたのは主なる神であり、またウイルスを造られたのも神です。

今日、多くの人間は科学技術を万能のものとして受け入れています。そのために神の存在は影が薄くされています。人間は科学の力を信じることによって、神を無視して、傲慢にさせられているのです。

しかし、詩編100篇の記者はこう勧めています。感謝しつつ門に入り、ほめたたえつつその大庭に入れ、と。つまり、主なる神に感謝し、ほめたたえ、主なる神に礼拝を捧げることを勧めているのです。

長い人類の歴史の中でペストやコレラ、そして天然痘などの疫病が流行し、多くの命が失われた事実があります。教会が誕生して間もないローマにおいても、165年から180年にかけて「アントニヌスの疫病」と呼ばれた感染症が発生して、多くのローマ市民が命を失っています。疫病が蔓延したとき、人間はそれを恐れ、おののきました。しかし、疫病が消滅した後はどうでしょうか。人間はそのことを、まるでなかったかのように忘れ去っているのです。

しかし、詩編100篇の記者は呼びかけています。主なる神は恵み深く、そのいつくしみは限りなく、そのまことは限りがない、と。

ナショナルジオグラフィックという写真雑誌が新型コロナウイルスの特集号を出しています。その記事の中に、コロナウイルスと環境との関係についての記事がありました。記事にはこう書かれています。

”この数百年、地球に多大な影響を及ぼしてきたのは、欧米文化の根底に流れる物語だった。聖書がその出発点だ。

創世記の第1章には、人間は地を這うあらゆる生

き物を治めるように言われたと書かれている。米デューク大学の神学者エレン・デービスは、この1節についてこう話してくれた。

『『治める』(英語で **dominion**) と聞くと、人間と人間が全世界に容赦なく力を振るう『支配』を連想します。』

しかし、この部分に当たるヘブライ語の「ラーダー」は違う意味だと、デービスは考える。だとすれば、西洋文明はよりどころとなる原典の誤解に基づいている面もあるのではないかと。

神は人間よりも先にほかの生き物を創造し「満ちよ、増えよ」と祝福しているのだ。ヘブライ語のラーダーには、「その祝福を無効にする」意味はないはずだと、デービスは話す。にもかかわらず人間はそんな行動に走り、地球をわが物として、ほかの種を根絶やししてきた。

デービスはラーダーを「治める」ではなく、「神の創造物に対して優れたわざを発揮する」と訳す。神は自らが人間を創造したように、職人として創造の腕を振るい、創造物の世話役を務めることを人間に命じたのだ。それを読み違えたため、重大な結果を招いてしまった。

西洋文明の物語は、17世紀の啓蒙主義の時代にさらに別の方向へ向かう。堅苦しい古典から精神が解放されたのはいいが、地球の支配者たる人間という意識に拍車がかかったのだ。”

記事を書いた記者は、人間が啓蒙主義を通して手に入れたものは科学万能主義であったと結論付けています。そこからもたされた一つの帰結点が経済の成長に邁進することであったのです。つまり、人間は欲望のとりこされてしまったのです。そして、人間が欲望にとりつかれて築いてきた文明、そこから新型コロナウイルスの発生を招いたと、この記事は読めます。

ヘブル書にもこう記されています。”金銭を愛することをしないで、自分の持っているもので満足しなさい。主は「わたしは、決してあなたをはなれず、あなたを捨てない」といわれた。だから、わたしたちは主に言おう。「主はわたしたちの助け主である。わたしには恐れはない。人は、わたしに何ができようか」”

新型コロナウイルスの終息が見通せなくても、神のみことばを信じ、主なる神に礼拝を捧げることの大切さを詩篇100篇から教えられます。同時にヤスクニ問題から目を離してはならないことも教えられます。